

ルカによる福音書2章13-14節 「天に栄光、地に平和」

1A 神への栄光

1B ローマの栄光

2B 見下された羊飼い

3B 飼葉桶の嬰兒

4B 天における栄光

2A 人への平和

1B パクス・ロマーナ

2B 御心にかなう人々

1C 御父が喜ばれた方

2C 平安に満たされた方

3C イエスにある平安

本文

ルカによる福音書 2 章を開いてください。私たちの聖書の学びは、2 章に入ります。午後に一節ずつ読んでいきたいと思いますが、今朝は 13-14 節に注目します。「13 **すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」**」

イエス様が、お生まれになったことを天の御使いが羊飼いたちに伝えました。そして、今このように、おびたしい数の天の軍勢が現れ、神を賛美しました。そしてその賛美の言葉が、有名な、「いと高き所で、**栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。**」であります。一つは、栄光が、いと高きところ、つまり天において、神にあるようにという言葉。もう一つは、平和が、地上において、御心にかなう人々にあるようにという言葉です。天には神に栄光、地には人に平和が、ということですね。この二つについて、学んでいきたいと思います。

1A 神への栄光

1B ローマの栄光

ところで先週、私たちの何人かが、帰納的聖書の学びのセミナーに参加しました。そこで、聖書そのものをじっくりと見ていく、観察というのがとても大切であることを学びました。とかく、私たちは見ているつもりで、それで分かっているつもりでいて、しっかりと見ていないことが多いです。あるいは、何度も聞いているので、分かっているつもりになるのですが、しっかりと聞いていないことが多いですね。イエス様が、十字架に付けられる前に何度となく、はっきりと三日目の甦ることを語られましたが、弟子たちの中でそれを信じていた人は誰一人いませんでした。聖書を見ていく時も、

それと似ています。

ルカ 2 章は、毎年年末にお祝いされているクリスマスの箇所です。私たちが思い描くのは、羊飼いが野原にいて、天使たちが出て来て、行ってみると、牛や羊がいる中で飼葉桶に寝ておられる、かわいらしいイエス様の姿です。私たちはどうしても、羊とか牛というのどかな雰囲気になるし、赤ん坊が出てきているので、ほんわかした気持ちになります。絵で描かれるものも、そういった者が多いからです。

けれども、ルカは 2 章を、「全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストゥスから出た」という言葉から始めています。この言葉を聞いた時に、この福音書を受け取ったティオフィロは、ローマ高官であったでしょうから、すぐにその政治的意味が分かったことでしょう。栄光に輝いているのは、ローマ皇帝本人でした。

ローマ帝国こそ、世界史の中で中心的存在と言っても全く過言ではありません。歴史が好きな人、例えば塩野七生さんの「ローマ人の物語」が好きな日本人も多いかと思います。あるいは、古代ローマの映画を観た人も多いのではないかと思います。それは、世界の歴史の中で何百年も続き、その後の世界の歴史に決定的な影響を与えた、ローマ帝国の幕開けの時だからです。

今で言うならば、アメリカ合衆国でしょう。世界に軍隊を置いて、経済においても、私たちの利用している製品で、どれだけが米国からのものか知れません。マイクロソフト、アップル、アマゾンなどの IT 系もそうですし、マクドナルド、スターバックスなどの飲食系もそうです。そして世界情勢のニュースは、アメリカが中心です。なぜなら、大統領の言っていること、やっていることによって世界が動いて行くので、他人事に思えないからです。先週、ある講義を受けまして、実はアメリカが古代ローマに似ているだけでなく、模倣しているかもしれないという説明を受けました。私は去年、トルコとギリシアに行き、今年もトルコに行って、ローマやギリシアの遺跡を見たので、びっくりしました。確かにワシントン DC にある、国立資料館は、まるでイタリアのローマにある古代ローマの神殿にそっくりです。その神殿は、ギリシアのアテネにあるパルテノン神殿を模したものです。そして、ワシントン記念塔は、ローマがエジプトから持ってきたオベリスクに酷似しています。どれだけ意識しているかどうか知りませんが、ローマ帝国の栄光が今の、超大国であるアメリカにも引き継がれています。

だから、その初代皇帝であるアウグストゥスは、神がかった人と思われても、おかしくありません。アウグストゥスは「尊厳者」という意味です。ところで英語で 8 月は、August ですがまさにアウグストゥスから来ています。この言葉には神聖な意味合いがあります。彼は初め独裁官としてみなされますが、それよりも王になり、それ以上の存在になり「皇帝」となりました。人間の王以上の、神聖な存在です。彼は神の子と呼ばれ、数多くの国々と民族を統合させているのですから、皇帝礼拝

が始まりました。ローマ帝国の各地には、皇帝を神として祭る宮の跡が至る所にあります。東京には明治天皇の祭られている明治神宮があり、日光には徳川家康が神として祭られている東照宮がありますが、それどころではありません。ローマは今のヨーロッパ、トルコ、シリア、ヨルダン、レバノン、イスラエル、など中東地域、そしてエジプト、リビアなど、北アフリカ諸国全域を支配していましたが、その主権を称えるために、皇帝が神となっていたのです。したがって、「栄光」と言ったら、それは「ローマであり、皇帝である」ということになるのです。

そしてこの専制君主が、住民登録をしないとローマ全体に勅令を出します。自分の所有となっている住民がどれだけいるかを誇りたいというエゴです。けれども、私たち数十人であっても、自分の故郷に戻って住民登録しないといたら、「ちょっと待って、これこれの用事があります。仕事があります。あの病弱なので、長旅ができません。」とか、いろいろな事情があるでしょう。いいえ、そんな訴える余地など何一つありません。皇帝の勅令は絶対なのです、だから、マリアも身重になっているのに、ナザレからベツレヘムまで長旅をしなければいけなかったのです。こういう時に、否が応でも自分たちは皇帝の支配の中にいることを思われるのです。

ですから、「いと高き所で、栄光が神にあるように」というのは非常に大きな言葉なのです。これは、神ご自身が永遠の支配者であられ、主権者であられ、ローマ皇帝でさえも無に帰せられるのだということを伝えているに他なりません。ダニエル書に、ローマ帝国の預言が幻の中に出て来ます。人の像の脚の部分、鉄になっていますね。それから、四頭の獣の第四の獣、十本の角があり、牙が鉄になっていた獰猛な獣です。しかし、どちらの幻にしても、人の子、つまりキリストが来られて、それらの帝国を全く粉々に粉碎されるのです。「ダニ 2:44 この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。」キリストによる神の国が永久にあるのだということです。ダニエルがかつてそうであったように、バビロン帝国において、謙虚に王に仕えていたように、私たちもこの世にあって、それぞれ置かれているところで、謙虚に神に仕え、人々に仕えます。その中で、神の御霊は必ず、ご自身の永遠の御国を、私たちを通して、人々に証しておられるのです。

2B 見下された羊飼い

そして、この天使からの啓示を受けたのが、羊飼いだったということです。野原にいる羊飼いです。ローマ帝国を陰らせるほどの、大いなる神の栄光を天使たちが見せたのは、野原で夜番をしている羊飼いでした。羊飼いについて、私たちはあまり悪い印象を持っていませんね。けれども、聖書に出て来る羊飼いの姿からは、とても地味な仕事であることがわかります。ラケルなどが羊飼いをしていた様子がありますし、イテロの娘たちもそうでした、まさにここに出てきたダビデは、八人目の末の子で、羊飼いをやらせていたということでした。私がベツレヘム近郊で見た羊飼いをしているパレスチナ人の子たちは、明らかに貧しい格好をしていました。

当時の文献では、「卑賤」とみなされていました。卑しく汚れた職業として、羊飼いや列挙されています。汚い職業として、取り上げられています。ですから、天からの栄光を主がこのように羊飼いに見せたというのは、まさにマリアが神に賛美をした時の歌のようです。「ルカ 1:52-53 権力のある者を王位から引き降ろし、低い者を高く引き上げられました。飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせずに追い返されました。」今、話しましたように、羊飼いであるダビデこそが、王となり、彼が善い統治を行ったことについて、詩篇では羊飼いのように治めたことが書いてあります。羊飼いというのは民を養い、導き、支配する光栄な職業です。そして、詩篇では「主はわたしの羊飼い」とあり、主ご自身に使われており、イエスご自身が、「わたしは良い羊飼いです。」と言われました。しかし、元々は卑しい職業だったのです。

日常の職業で、なければいけない尊いことをしているのに、なぜか卑しまれる傾向にあるものがありますよね？例えば、ゴミ収集車で働く方々です。なんと尊いお仕事でしょうか！また、ご遺体をきれいにし、納棺する職業も、とても尊い働きをしています。けれどもどういふわけか、汚れているとみなす人たちがいます。

私たちは、それぞれの場で主に出会うことができました。その場は、ある意味、人にはあまり話したくない内容かもしれません。自分には否定的な感情が伴う状況があつて、それがきっかけで、イエス様に最終的に出会えたということかもしれません。しかし、主は私たちが実は抜け出したいと願っているような、嫌だと思っているような状況の中で、ご自身を現わしてくださいませ。私たちがしばしば歌う賛美で、「天に触れる(Touch the Sky)」がありますね。そこに、「地に落ちたときに、主の愛を見つけた」とあります。英語の歌詞を直訳しますと、「私の膝が地面を打った時、私は空に触れます」ということです。つまり、落ちてどん底に来た時に、実は天に触れたということなのです。神は、このような逆転を行ってくださいませ。

3B 飼葉桶の嬰兒

そして、イエス様が、「飼葉桶に寝ているみどりご」を、羊飼いに印として与えられます。メシアが、ダビデの末裔として生まれる約束があるのですが、この方こそがイスラエルの救いとなり、世界に光となる方ですが、王家の部屋で生まれるのではありませんでした。もし、王家の家で生まれるのであれば、一般の庶民も見ることにはできませんが、ましてや羊飼いや絶対に近づくことはできません。けれども、飼葉桶です。これは、羊飼いであつても、誰でも近づけます。

なぜイエス様がそこでお生まれになつたかと言いますと、「2:7 宿屋には彼らのいる場所がなかつたからである」とあります。ここも、しばしば私たちは自分たちのイメージを投影させてしまいがちです。当時の人々の生活は、岩に穴を開けて住んでいました。そして、一番奥のところに家畜を飼ひ、家畜の体温で洞窟の中が温まる効果もありました。飼葉桶も、岩に穴を掘ってそこに藁を入れていました。そういった家には、余計に客間も作っている人たちもいて、「宿屋」というのは、ギリシ

ア語ではそういった客間も意味します。ですから、お客さん用の部屋は空いておらず、家畜のいるところに追いやられていた、ということです。それで、男性は外に出して、女性の何人かでマリアの出産を手助けしたのではないか？と思います。いずれにしても、羊飼いで十分に入っていくことができるようなところに、イエス様はお生まれになりました。私たちは、私たちのありのままの姿で主のもとに近づくことができます。

4B 天における栄光

そして、「いと高き所」における栄光、つまり天の栄光です。私たちが信仰生活を歩んでいて、試されるのは、目に見えないところを、神が言われるがゆえに信じて生きていることです。霊について、私たちは信じています。そして天もそうですね、見たことがないけれども、それははっきりとあることを信じています。イエス様は、ニコデモに、「ヨハ 3:3 人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」と言われましたが、そこは「上から生まれなければ」と訳すこともできます。天から生まれることです。ですから、霊的に新しく生まれた人は、到底、人の世界ではありえない変化を遂げることができます。これは、天からの賜物であり、良きもの、完全なものなのです。

地上においては、ローマのような栄光があります。けれども、地上だけが栄光なのではありません。むしろ、天において、人々が恐れて倒れてしまうほどの栄光が、天においては輝いているのです。黙示録 5 章には、天における情景があります。そこで、聖徒たちがイエス様をほめたたえています。そして無数の御使いがほめたたえました。「黙 5:11-12 また私は見た。そして御座と生き物と長老たちの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。彼らは大声で言った。「屠られた子羊は、力と富と知恵と勢いと誉れと栄光と賛美を受けるにふさわしい方です。」そして全ての造られたものが、やはり子羊に対して賛美と礼拝を捧げているのです。

私たちは、御霊によって、その栄光を仰ぎ見る恵みを受けています。礼拝において、その中の賛美によって、信仰をもって歌う時に、天における神の栄光に触れることができます。賛美は、説教のための余暇ではありません。コリント第一 13 章には、預言や知識はすたれる、部分的だと言っていますが、ある意味、説教よりも賛美のほうが礼拝として、永続するものなのです。表向きは、何でもない少人数の者たちが、必ずしも音程が合っているわけではない歌声をもって歌っていますが、信仰によって、とてつもない神の栄光を見上げているのです。

2A 人への平和

1B パクス・ロマーナ

それでは次に、「**地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように**」を見てみましょう。

平和というと、何となく戦争のない状態を私たちはくみ取ると思います。日本人は日頃、自衛隊

や米軍の武器や兵器を見ることがないので、平和というのが実はそういった武力と隣り合わせだということは、あまり意識しないかもしれません。けれども、当時のローマは、アウグストゥスが皇帝になった時に、ついに平和が訪れたと言って過言ではありません。それは、武力による平和でした。数々の敵と戦い、征服し、そして今度はローマの指導者たちの中で内戦が起こりました。数々の戦争を終え、ついにローマに平和が訪れたということで、これを「パクス・ロマーナ」と呼びます。戦国時代で不安定な世情がずっと続いた後に、徳川幕府によって平定され、長い期間、争いがなかったのですが、それが何十倍も大きな規模で平定されたのです。それで、この平和をもたらしたということで、アウグストゥスは「救い主」としても称賛されました。

パックス・ロマーナの中で、もちろん暴力がなくなるわけではありません。兵士が剣を出して、一ミリオン荷物をかつげ、と命じられたら、文句なしにその通りにしないとはいけません。総督ピラトが、ガリラヤ人の捧げるいけにえに、ガリラヤ人の血を混ぜたという話がルカの福音書に出て来ます。そして何よりも、ローマに反逆するならば、鞭打ちの刑に、そして、大通りには十字架に付けられた男たちが磔にされています。庶民たちは、平穩の中にも、強権を感じつつ日々を過ごしていなければいけなかったのです。

しかし、私たちの救い主は、力で抑えつける平和をもたらすために来られたものではありません。飼葉桶で布に包まれている嬰兒なのだとやっているのが、ルカが書き記していることなのです。私たちが罪を犯したのであれば、力をもって処罰するのではなく、むしろ我々と同じ人となられて、その肉体において身代わりに処罰を受けてくださったのです。その始まりが、この嬰兒です。その小さな体は成長し、将来、私たちの罪のためのいけにえになられるのです。この愛に触れたからこそ、反逆する心ではなく、心から服従する心が与えられます。平和は、従うことによって与えられますが、強いられてではなく、愛しているから従います。キリストの愛によって私たちの心は一新し、心は平和になり、そして平和を造る者となっていきます。

2B 御心にかなう人々

ところでこの箇所は、「**地の上で、平和**」ということで、世界平和を願っている時にしばしば引用される箇所です。世界平和を願った歌は実に多いですね、誰もがそれを願っています。けれども、ここもしっかりと、本文を読んでいただければ、漠然と世界全体が平和になることを話しているではありません。「**平和がみこころにかなう人々にあるように**」と言っているのです。御心にかなう人々にのみ、平和があるようにと御使いたちは歌っているのです。ここは、直訳は、「神に喜ばれる人にあれ」となっています。

1C 御父が喜ばれた方

どういった人が、神に喜ばれるのでしょうか？御心にかなっているのでしょうか？それは、イエス様に自分を明け渡している人です。父なる神が愛し、喜ばれているのは、ご自分の独り子キリストで

す。この方がバプテスマを受けられる時に、聖霊が鳩のような形をして降ってきましたが、次に、天から声がしました。「4:22 あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」イエス様は、御霊に満たされ、導かれ、そして神に良く祈り、それから父なる神の御心に従われました。自分の願いではなく、あなたのみこころが成りますようにということです。

2C 平安に満たされた方

ですから、イエス様は全き平安を知っておられました。それは、問題がなかったということではありません。むしろ、葛藤が多かったのです。パリサイ派とは、絶えず議論をしておられました。しかし、その時、主の思いには沈着さがありました。そして嵐がありました。しかし、弟子たちの舟で寝ておられました。そして、ご自身の死でさえ、「ヨハ 10:18 だれも、わたしからいのちを取りません。わたしが自分からいのちを捨てる権威があり、再び得る権威があります。」と言われました。主は最後の最後まで、平安に満たされた方でした。

3C イエスにある平安

そこで主は復活された後に、弟子たちに現れて言われます。「ヨハ 20:19 平安があなたがたにあるように。」御心にかなう人、あるいは神に喜ばれる人、とは、「イエス様の中にいる人」と言って良いでしょう。私たちが御心にかなうことはできません。しかし、イエスが父なる神を喜ばせておりました。ですから、この方につながっていれば、自ずと自分にも平和が訪れます。そして、自分が平和であれば、周りの人たちにも平和を造ることができます。